

「動き」を表す漫画のオノマトペ - 「歩く・走る」を例として -

Sound Symbolic Words which Express Actions in Japanese Comic Books: Examples of Walking and Running

平 弥悠紀

要 旨

漫画には多くのオノマトペが見られるが、本稿では、「動き」を視点として、オノマトペを取り上げ、中でも「歩く・走る」動きについて、擬音語、擬態語がどのような役割を果たしているのかについて考察した。

擬音語・擬態語の辞書によると、人間の全身の「動き」の中で、「歩く」動作に関するオノマトペが最も多く見られる。一方で、「走る」に関するオノマトペは少数である。

本稿で資料とした森本梢子著『研修医 なな子』（全7巻、1995-2000年、集英社）では、「歩く」動作そのものを表現する場合、「歩く」に関するオノマトペではなく、擬音語が多く用いられている。特に「走る」に関しては、擬音語を活用して、「走る」動作を表現していると考えられる。絵にオノマトペを添えて、絵では表現しきれない内容を補うばかりでなく、絵はなくても、オノマトペだけで十分「動き」を読み取ることができる場合もある。このような「動き」を表現するオノマトペは、単に「動きの効果を高めるため」の「効果音」というよりも、「動き」そのものを表現するツールになっていると考えられる。そして、「音や動きのない時間を造り出す」促音によって、動きの遅速を表現したり、リズムに変化を与えたり、オノマトペの様々な語形によって、動きの違いを表現し分ける。また、「歩く」カテゴリーのオノマトペは、歩く動作そのものよりも、身体機能に影響されたり、健康状態や心理状態を反映した歩き方を表現していた。

キーワード

日本語 漫画 オノマトペ 擬音語 擬態語 動き 歩く 走る

1 はじめに

日本語はオノマトペの豊富な言語だと言われており、漫画にもオノマトペが数多く用いられていることは一般に知られている。映画やアニメは映像と音響・音声を主たる表現手段とするが、漫画は絵と文字を表現手段とする。紙媒体であるがゆえに、映

画やアニメでは表現できることも漫画では表現に工夫が必要であり、物音や生物の声、人物の様子や感情など、臨場感をもって描写するために、オノマトペが活用されているのではないかということは容易に推察される。

日向茂男（1986a）は、漫画の擬音語は「マンガとして描かれた絵の中の動きの効果をも高めるため」の「効果音」であると述べる。また、山口仲美（2005）では、コミックにおける擬音語・擬態語の機能をまとめるが、その一つとして、擬音語・擬態語は、コミックにとって、「時間の流れを造り出す重要な道具」とであると分析する。

本稿では、漫画について「動き」を視点として、オノマトペを取り上げる。漫画で「動き」を表現する場合、中でも「歩く・走る」動きについて、擬音語や擬態語がどのような役割を果たしているのかについて考察する。なお、本稿では、擬音語、擬態語という言葉の総称として「オノマトペ」を用いる。

2 「動き」を表す擬音語・擬態語

日本語のオノマトペを意味分野によって分類した書として、日向茂男監修（1991）『擬音語・擬態語の読本』が挙げられる。また、小野正弘編（2007）『擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』の「意味分類別さくいん」においても、意味分類がなされている。以下、本稿では『擬音語・擬態語の読本』を『読本』、『擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』を『オノマトペ辞典』とする。次の表は、両書の分類を筆者がまとめたものである。

日向茂男監修『読本』		小野正弘編『オノマトペ辞典』	
人の動き	全身	自然	天気
	頭・顔		温度
	目		水・液体
	鼻		火・土
	口	人間	動作・状態
感情・表情	感情・感覚		
物の動き・変化	性格・性質		
形状・状態	体格・姿		
音声・擬音	事物	動き・変化	
程度		時間の尺度で	形・状態
		度量の尺度で	程度

人間の動きを表すオノマトペは、『読本』では「人の動き」に、『オノマトペ辞典』では「人間」の「動作・状態」に分類されており、それぞれの書における、人間の動きを表す上位の語を示すと、以下のとおりである。

『読本』

「人の動き」の上位	1. <口>言う・話す	31 例
	2. <全身> <u>歩く</u>	22 例
	3. <目>見る・にらむ	19 例
	4. <全身>痛む・感じる	15 例

『オノマトペ辞典』

「人間－動作・状態」の上位	1. 言う・話す	80 例
	2. 食べる・かむ・なめる	73 例
	3. 飲む・酔う	67 例
	4. <u>歩く・走る</u>	56 例
	5. 見る・見える・にらむ	53 例

『読本』において、「人の動き」<全身>に分類されるものの中で最も多くのオノマトペが採録されているものは「歩く」に関するもので、以下の22例を挙げる。「走る」は分類項目としては立てられていないが、「歩く」の項目の中に、「たったっ（と）」のように「走る」に関連するオノマトペが含まれている。動く速さの遅いほうから速いほうに考えると、「歩く→早歩きする→小走りする→走る」のように考えられ、早歩きや小走りになると、歩く動作なのか走る動作なのか、明確には区別できない動きもあるので、「歩く」と「走る」を完全に分類するのは難しいと思われる。

すたこら／すたすた／せかせか／たったっ（と）／つかつか／ちょこちょこ／とことこ／とと（と）／ひよこひよこ／のっし／のし（と）／てくてく／のそのそ／のろ／とぼとぼ／ぶらぶら／ふらふら／よたよた／よちよち／よろよろ／えっちらおっちら／しゃなりしゃなり

一方、『オノマトペ辞典』の「意味分類別さくいん」では、「人間」の「動作・状態」に関するオノマトペの中に【歩く・走る】としてひとまとめにされており、以下に示す通りその数は56例にも上る。

うろうろ／えっちらおっちら／かっぼかっぼ／さっさ／さっさっ／しゃなりしゃなり／しゃりしゃり／すたこら／すたこらさっさ／すたすた／せかせか／たー／たーっ／たかたか／たじたじ／だだー／たたたた／だだだだ／たったかたっか／たったっ／たどたど／ちょこちょこ／てくてく／てけてけ／どっしどっし／とーん／とことこ／ととこととこと／とととと／とと／ととと／どたばた／とぼとぼ／のさのさ／のし／のそのそ／のっし／のり／のり／のろ／のりのり／ばかばか／ばっばか／ばたばた／ばたばた／びたびた／ひよこひよこ／ふらふら／ぶらぶら／よたよた／よちよち／よほよほ／よ

ろよろ／らったった／わたわた／のこのこ／ばっば

用例数が多い理由としては、「歩く・走る」と共起する語を幅広く挙げているからではないかと推測される。例えば、「さっさ」は急いで物事を行う様子を表し、「さっさと宿題を終えて、遊びに行こう。」のように用いられるが、『読本』では「程度」〈時間の尺度で〉のオノマトペとして分類されている。『オノマトペ辞典』でも【歩く・走る】以外に、「事物」の「程度に関するオノマトペ」にも分類されている。「せかせか」は慌ただしく動作などが落ち着かない様子を表し、「働き者の母は、朝早くからせかせかと動き回っている／家事をこなしている。」のように、「歩く・走る」に限らず、種々の動詞と共起する。『読本』では「感情・表情」にも挙げられており、『オノマトペ辞典』でも同様に、「人間」の「感情・感覚に関するオノマトペ」にも分類されている。また、動きが遅い様子を表す「のろのろ」は両書に見られ、「のろのろ歩く」以外に、「作業がのろのろしてはかどらない。／渋滞で、車はのろのろとしか進まない。」のように用いる。『読本』では「物の動き・変化」に、『オノマトペ辞典』では「事物」の「程度に関するオノマトペ」にも分類されている語である。このように「歩く・走る」という動詞と共起する語で、スピード（遅速）やその時の心理状態を表したものなど、幅広く例として挙げられているようであるが、『オノマトペ辞典』においても、人間の「全身の動き」を表すオノマトペの中で、最も多くの例が見られるのが「歩く・走る」という動きに関するオノマトペである。

そこで本稿では、漫画の中で「歩く・走る」という動作について、森本梢子著『研修医 なな子』（全7巻、1995-2000年、集英社）を中心に、どのようなオノマトペがどのように活用されているのかについて考察する。この漫画は、医師免許を取得したばかりの女性医師が、大学病院で臨床研修を行う中で、一人前の医師に成長していく姿を描いたコメディ作品であり、漫画の中には、医師や看護師、また子供から高齢者に至るまでの幅広い年齢層の患者の「動き」を描写した場面が見られるのである。

〔本稿に引用の図〕 森本梢子著『研修医 なな子1』（1995年、集英社）、

『研修医 なな子2』（1996年、集英社）、『研修医 なな子3』（1997年、集英社）、

『研修医 なな子4』（1998年、集英社）、『研修医 なな子5』（1998年、集英社）、

『研修医 なな子6』（1999年、集英社）、『研修医 なな子7』（2000年、集英社）

3 「歩く・走る」動作を描写するオノマトペ

前章で述べたように、早歩きや小走りなど、「歩く」動作なのか「走る」動作なのか、明確には区別しにくい動きもある。また、それぞれに用いられたオノマトペが、擬音語であるのか擬態語であるのかについても判断の難しい語もあるが、それぞれが特徴を有していると考えられるので、漫画の中で、「歩く・走る」動作に伴うオノマトペに

ついて、擬音語、擬態語それぞれの用いられ方を見ていく。

3.1 擬音語の用いられた「歩く」の例

漫画の中で、「歩く・走る」動作について、「誰が、何を履いて、どのようなスピードや足取りで歩いている・走っている」のか、また、ある場合には「どのような素材の床を歩いている・走っている」のかを表現する場合もあるが、もっぱら擬音語が用いられている。

まず、「歩く」に関する擬音語の例を以下に挙げる。図1「カランカラン」は、秋本治著『こちら葛飾区亀有公園前派出所』（第80巻、1993年、集英社）の例であるが、「人が下駄を履いて、歩いたり、小走りする時の音」、図2～図6は、『研修医 なな子』の例である。図2「コッ」は「人が底の堅い靴を履いて歩く時の音」、図3「カッカッ」も「人が底の堅い靴、ハイヒールなどを履いて歩く時の音。」を表すが、「コッコッ」（本稿で扱った漫画には例がない）よりも力強さやスピード感を多少感じる。同じく図3「パタパタ」は「人が底の平べったい靴（例えば、サンダル・スリッパなど）を履いて早歩き、小

図1 「カランカラン」



秋本治著『こちら葛飾区亀有公園前派出所』（第80巻、1993年、集英社）p.192

図2 「コッ」



『研修医 なな子4』 p.165

図3 「カッカッ」／「パタパタ」



『研修医 なな子1』 p.6

図4 「べたべた」



『研修医 なな子1』 p.45

図5 「カッ」「ゴッ」



『研修医 なな子2』 p.137

図6 「どすどす」



『研修医 なな子7』 p.13

走りする時の音。』、図4「べたべた」も「人が底の平たい靴（スリッパなど）を履いて歩いたり、小走りになったりする時の音。」であるが、「パタパタ」ほど足はあまり高く上がっておらず、スピードも遅い感じがするので、疲れた、あるいは元気のない様子を感じさせる。図5は、松葉杖をついて歩く場面であるが、「カッ」は松葉杖をつく音、「ゴッ」はギブスを巻いた足が床につく音によって、「歩く」という動きを読者に伝える。図6「どすどす」は「体重の重い人（妊婦さん・お相撲さんなど）や大きな動物が地面を踏み鳴らすように歩く時の音。」を表す。

これらのオノマトペのうち「歩く・走る」に分類されたものは『オノマトペ辞典』に「パタパタ」が見られるのみで、それ以外は「歩く・走る」の項目にはなく、「パタパタ」を含めて全て歩く・走る時に立てる音を表す擬音語である。

仮に、これらの場面で擬音語を用いなかったとしたら、その場に静止しているのか、あるいは動いているのか、絵を見ただけでは判断が難しいものがほとんどである。日向茂男（1986a）が述べるように、擬音語は「マンガとして描かれた絵の中の動きの効果を高めるため」の「効果音」であるのは確かだが、これらの例を見ると、単なる効果音にとどまらず、「動き」を表す重要なツールだと言ってもよいのではないと思われる。

前掲の山口伸美（2005）では、コミックにおける擬音語・擬態語の機能をまとめるが、その一つとして、「時間の流れを造り出す」ことが指摘されている。「擬音語・擬態語を使って、一枚の絵に動きと時間を与える方法である。たとえば、登場人物が物を食べている場面に『パクパク』とか『グニユグニユ』と書きこめば、食べている動きを表すことが出来るとともに、大口を開いて物を口に運んでいる時間、あるいは、口を閉めて噛みしめつつ食べている時間が出てくる。』、「一枚の絵は、時間の流れを意図的に造り出す必要に迫られる媒体なのである。擬音語・擬態語は、コミックにとって、時間の流れを造り出す重要な道具なのである。」（pp.751-753）と述べている。ここで例に挙げられた「ぐにゅぐにゅ」は臨時的なオノマトペであるからか、擬音語・擬態語の辞書には掲載されていない。咀嚼された食べ物の状態を表すのだろうと思われる。「ぱくぱく」は『読本』では「人の動き」<口>の「食べる」に分類され、『オノマトペ辞典』でも「人間」の「動作・状態に関するオノマトペ」【食べる・かむ・なめる】に分類されている。口を動かして食べるのではあるが、さほど大きな音を立てるわけでもなく、「食べる」様子を表すオノマトペによって、食べている様子を表し、また食べている時間を造り出しているのであるが、ここに挙げた図1～図6の「歩く」場面での例は、歩く様子を表すオノマトペによってではなく、床を歩く時に立てる音、つまり歩く動作によって履物が床に触れるときに出す音によって、歩くという動きを表し、同時に時間の流れも造り出しているのである。

3.2 擬音語の用いられた「走る」の例

次に、「走る」オノマトペについて考察する。早歩きなのか小走りなのか、「歩く」と「走る」は明確には区別しにくい場面もあり、前述の「歩く」オノマトペの例の中には、「早歩き・小走り」の図1「カランカラン」、図3「パタパタ」も含まれている。また、本稿「4」にも挙げる図28の「たたっ」も「急ぎ足・小走り」の例ではあるが、「走る」動きの場面でのオノマトペには、以下のような例が見られる。

図3「パタパタ」で「人が底の平べったい靴（例えば、サンダル・スリッパなど）を履いて早歩き、小走りする時の音。」と説明したが、図7では、子供がスリッパを履いて走っている時の音、図8「ばたばた」は、「ばたばた」よりも大きな音を立てて慌ただしく走る様子を表す。図9「カンカン」は階段を走って下りる場面で、鉄製の床を蹴る時の音の響きを表す。

例1～9は、語基「タ」のオノマトペ、例10～13は語基「ダ」のオノマトペで、様々なタイプの語が見られる。これらの中には、擬音語・擬態語の辞書では特に擬音語と

図7「ばたばた」



『研修医 なな子 2』 p.41

図8「ばたばた」



『研修医 なな子 2』 p.79

図9「カンカン」



『研修医 なな子 2』 p.145

語基「タ」のオノマトペ（例1～例9）

- 例1「たっ」（『研修医 なな子 4』 p.182）
- 例2「たたっ」（図28）
- 例3「たっ たっ たっ」（図10）
- 例4「たー」（『研修医 なな子 4』 p.42：
ネズミが走って逃げる例）
- 例5「たーっ」（『研修医 なな子 4』 p.129）
- 例6「たたた」（図11）
- 例7「たっ たっ たっ」（『研修医 なな子 6』
p.149）
- 例8「たたたた」（図19）（『研修医 なな子
4』 p.142）
- 例9「たたたーっ」（『研修医 なな子 4』
p.182）

語基「ダ」のオノマトペ（例10～例13）

- 例10「だっ」（図12）
- 例11「だだっ」（『研修医 なな子 1』 p.36）
- 例12「だだ～っ」（『研修医 なな子 3』
p.57）
- 例13「だだだーっ」（図13）

例3：図10「たっ たっ たっ」



『研修医 なな子 3』 p.89

例6：図11「たたた」



『研修医
なな子3』
p.71

例10：図12「だっ」



『研修医 なな子4』 p.61

例13：図13「だだだーっ」



『研修医 なな子4』 p.184

して扱われていない語も含まれているが、語基「タ」のオノマトペは、床を蹴るときの音をイメージさせられる。語基「ダ」のオノマトペは、あるいは擬態語として扱うのが適切かもしれないが、語基「タ」のオノマトペに対して、勢いの強さを表す。

その他、風を切るように速いスピードで走ることを強調する場面で、「びゅ〜っ」(『研修医 なな子6』 p.15)、その変形の「びょーっ」(『研修医 なな子4』 p.185)、階段を駆け上った後、走る場面で「てってってっ」(『研修医 なな子2』 p.145)、体重の重い人が走る場面で「でででっ」(『研修医 なな子3』 p.35)といった例が見られる。

日本語には「てくてく、とぼとぼ、よちよち」等、「歩く」に関するオノマトペが多数見られるのに対して、「走る」に関するオノマトペは少ない。前述のごとく、『読本』では「走る」という意味分類を項目として立てず、例3：図10「たったっ」が唯一「走る」に関するオノマトペだと思われるが、『読本』では「急ぎ足で歩くさま。」と説明されていて、特に「走る」さまを表すという注記はない。『オノマトペ辞典』でも【歩く・走る】として一つにまとめており、「走る」に関するオノマトペとしては「たー、たたーっ、たたたた、だだーっ、だだだだ」等、語基が「タ」、「ダ」である擬音語と、それ以外には「たかたか」、「ととと」、「どたばた」が挙げられており、数は限られている。『オノマトペ辞典』でも「たったっ」は「足早に大またで歩いて」と説明されていて、「歩く」のカテゴリーに入る。「たったっ」には「早歩き・小走り」など、「歩く」と「走る」の境界線上の動きもあり、「人間の体全体の足による移動」という視点で考えれば「歩く」なのか「走る」なのか、区分する必要性はあまりないかもしれないが、「走る」を表現するオノマトペは何かという観点から漫画を見ると、床や地面を蹴る時に発する「音」を表す擬音語によって表現されているものが多いと言えるのではないだろうか。走る場面の多いスポーツ漫画を見ると、図14は体操の跳馬の演技で走っている場面で、床を蹴る音「タッ タッ」、図15はバレーボールの試合で走っている場面で、バレーボールシューズと床との摩擦音「キュ キュ キュッ」によって、「走る」動きを表現している。

「動き」を表す漫画のオノマトペー「歩く・走る」を例としてー（平 弥悠紀）

図 14 「タッ タッ」



森末慎二原作・菊田洋之作画『ガンバ Fly high ④』
(1995年、小学館) p.123

図 15 「キュ キュ キュッ」



古舘春一著 ^{イラスト}『ハキョー!! 5 IH 突入!』
(2013年、集英社) p.192

『研修医 なな子』には、次の図 16、図 17 のような「はあ はあ」の例が見られる。「はあ はあ」は、口で呼吸する様子を表すオノマトペである。『オノマトペ辞典』の「意味分類別さくいん」には載せられていないが、『読本』では「人の動き」<口>「息を吸う・息を吹く」に分類し、「息をはく音、また、そのさま。急激な運動などの後に起こる。」と説明されている。図 16「はあ はあ」は、手術を手伝う研修医なな子の鼻がつままっていて、息苦しい様子を表しており、前掲の山口仲美（2005）で述べられたとおり、ここでのオノマトペは、口で呼吸するという「動き」と「時間」を与える役割を果たしていると言える。一方、図 17「はあ はあ」は、学会に遅刻しそうになった研修医なな子が走っている場面に用いられている。走っている絵に、息を吐く音を表すオノマトペを添えることで、「息を切らしながら走っている様子」を読者に伝えることができていると考える。オノマトペ本来の「息を吐く」という動きに加えて、「走る」という動きを表現するツールになっているのではないかと考える。

図 16 「はあ はあ・・・」



『研修医
なな子 1』
p.163

図 17 「はあ はあ」



『研修医 なな子 1』 p.163

次の図 18 「パタパタ パタパタ」、図 19 「たたたた」は、絵のない例であるが、このようなオノマトペのみの例は、漫画には多々見られる。絵はなくても、オノマトペのみで「走る」という「動き」は十分に読者に伝えることができる。床や地面を蹴ると

図18 「パタ パタ パタ パタ」



【研修医 なな子 1】
p.73

図19 「たたたた」



【研修医 なな子 4】 p.142

きに立てる音や、また息を吐く音によって、「走る」という「動き」を表現していると言ってもよいのではないだろうか。

3.3 擬態語の用いられた例

次に、漫画の中で、「歩く・走る」動作について、擬態語の用いられた例を挙げる。本稿で資料とした『研修医 なな子』の中で、図20「ふらふら」は、研修医なな子がインフルエンザのため、倒れそうな様子で歩いている場面、図21「すたすた」は、男性医師がなな子に言いたいことだけを告げると、(そのことはもう全く気にかけず、) 後ろも見ずにさっさと歩いて行く場面で用いられており、いずれも「歩く」動作である。「歩く」カテゴリーの擬態語には、身体機能に影響された歩き方、精神面に影響された、歩く様子を表現したものが多いが、「走る」動作には、こういった擬態語はない。体調も気持ちも、歩く様子に反映されやすいからではないかと考えられる。それに対して、「走る」擬音語はむしろ、スピード(足運びの速さ: タッタッタッタ<タタタ<ター)や勢い(語基「タ」<語基「ダ」)のほうに表現の力点があるため、擬態語よりも擬音語によって「動き」が表現されているのだと考える。

図20 「ふらふら」



【研修医 なな子 3】 p.165

図21 「すたすた」



【研修医
なな子 2】
p.36

「動き」を表す漫画のオノマトペー「歩く・走る」を例としてー（平 弥悠紀）

『研修医 なな子』には見られないが、心的状態を反映した「歩く」擬態語には、無遠慮に入り込む・踏み込む様子を表す「つつつか／ずかずか」、元気なく寂しそうに歩く様子を表す「とほとほ」等があり、他の漫画には例が見られる。

次の図22「ととととと」、図23「だっ だっ だっ」は、擬音語と擬態語の境界線上の語である。一つのオノマトペにはいくつかの用法があるものも多く、また、擬音語か擬態語なのか区別しにくいものもあり、明確に分類することは難しいが、身体機能に影響された歩き方、精神面に影響された歩き方として、ここに挙げておく。図22「ととととと」は、足がもつれてよろける場面、図23「だっ だっ だっ」は、なな子の指導医が力強く歩いている場面で用いられている。語基「ダ」のオノマトペは、「3.2 擬音語の用いられた「走る」の例」で、「走る」場面で用いられた他のヴァリエント（例10：図12「だっ」、例11「だだっ」、例12「だだ〜っ」、例13：図13「だだだーっ」）を挙げたが、図23「だっ だっ だっ」は「歩く」場面である。濁音によって力強い歩き方を表現しており、なな子の指導医の自信に満ちた心の様子まで読者に伝えていると考えられる。

図22「ととととと」



『研修医 なな子 1』 p.21

図23「だっ だっ だっ」



『研修医 なな子 4』 p.20

その他にも、歩く場面で、「のこのこ」（指導医のおごりで、研修医たちが厚かましく食事について行く場面『研修医 なな子 1』 p.25）、「ぞろぞろ」（教授回診に大勢の医師がついて歩く場面『研修医 なな子 1』 p.34）、「ざっざっ」（教授回診に付き従って、大勢の医師が階段を勢いよく上る場面『研修医 なな子 4』 p.183）といったオノマトペの例も見られる。

以上のように、擬態語の「歩く」カテゴリーのオノマトペには、身体機能に影響された歩き、精神面に影響された、歩く様子を表すものがあるが、これらを含めて以下のような視点で分類すると、様々な情報を伝えることができるツールであることがわかる。

視点	例
誰が	よちよち (歩き始めたばかりの赤ちゃん・幼児)
歩くペース	てくてく (同じペースで)
正常に歩いているのかどうか	よろよろ (倒れそうな様子)
どんな気持ちで	とほとほ (元気なく)

3.4 なぜ漫画にオノマトペが用いられるのか

漫画にオノマトペが多く見られる理由の一つとして、オノマトペのもつ情報量について考えたい。「3.3」でオノマトペの伝える情報について言及したが、ここでもう少し詳しくまとめる。

擬声語の「ワンワン」から、だれでも「犬が吠えている」時の声をイメージする。「キャンキャン」は「(大型犬ではない) 犬が吠えている」、あるいは大型犬なら「痛みや恐怖のために鳴いている」時の声をイメージするかもしれない。擬音語の「自然」を描写するものとして、例えば「ザーザー」なら「雨が激しく降っている」時の音をイメージする。擬声語と同様に、「(どんな) 何が/どのように/どうする」まで、広くイメージさせるが、「事物」の擬音語になると、「何が」の部分が曖昧になり、例えば「カタカタ」は「かたい物が連続的に触れ合ったり、軽くぶつかり合ったりして発する音」〔(何が) どのように/どうした〕をイメージする。擬態語は、「3.3」で例として挙げた「歩く」カテゴリーの「よちよち」のように、「(どんな) 何が/どのように/どうする」〔歩き始めたばかりの赤ちゃん・幼児が、足取りもおぼつかない様子で歩く〕までイメージさせるものもあるが、「事物」の動きを描写する「ころころ」は「丸いもの・小さいものが回転する」〔何がどうした〕、「事物」の状態を描写する「きらきら」は「明るく、まぶしく光り輝くさま」〔どのように/どうだ〕のように、擬声語・擬音語よりもイメージするものが限定される。程度の擬態語になると、動作の素早い様子を表す「さっ」、量や程度の少ない様子を表す「ちょっぴり」は、「どのように・どのくらい」のように、イメージするものが更に限定される。

以下は、必ずしもすべてのオノマトペに当てはまるわけではなく、例えば「事物」の状態を描写する「ふんわり」なら、「この布団はふんわりしている。」〔何がどうだ〕のように、2. 擬態語の情報の組み合わせは変わるのであるが、情報量から考えると、概ね

「1. 擬声語・「自然」の擬音語 > 1. 「事物」の擬音語 > 2. 擬態語 > 3. 程度の擬態語」のように考えられるのではないだろうか。

1. 擬声語・擬音語	⇒ (どんな) だれ/何が	どのように	どうした
2. 擬態語	⇒ (だれ/何が)	どのように	どうした/どうだ
3. 程度の擬態語	⇒	どのように・どのくらい	

「動き」を表す漫画のオノマトペー「歩く・走る」を例としてー（平 弥悠紀）

漫画のストーリー、そして絵によって「だれが・何が」「どのように」「どうした」の情報は伝えることができるが、絵で表現しきれないものや、更に加えたい情報をオノマトペで補うことができるのではないだろうか。特に、擬声語の情報量は多く、必ずしも絵を描く必要はない場合もある。セミが鳴いているなら、セミの絵は描かなくても、「ミーンミーン」（ミンミンゼミ）、「ジージー」（アブラゼミ）といったオノマトペだけで十分表現できる上、真夏だという季節まで表すことができる。『研修医 なな子 7』（p.14）には、カエルが鳴いている場面に、カエルの絵は一匹も描かれていないが、「ケロケロ」「ゲロゲロ／ゲーロゲーロ」等のオノマトペで、たくさんのカエルが鳴いている様子を表現している。「ゲロゲロ／ゲーロゲーロ」は「ケロケロ」よりも大きなカエルでクロテスクな感じもする。

本稿「3.2 擬音語の用いられた「走る」の例」にも、オノマトペのみで絵の書かれていないものとして、図 18「パタパタパタパタ」、図 19「たたたた」を挙げたが、「（どういった履物を履いて、）どのくらいの音を立てて、（どういった様子で）何をしている」のかといった多くの情報を伝えることができる。このように、オノマトペのもつ情報量の多さということも、漫画にオノマトペが活用される一つの理由ではないかと考える。

次に、擬音語・擬態語の文法的特徴についてである。前掲の金田一春彦（1978）「擬音語・擬態語概説」、および鈴木雅子（2007）「解説ー歴史の変遷とその広がり」において、オノマトペの「文末用法」と「文中用法」について解説されており、文末では、新聞などの見出しや記事に、そのままの形で用いられること、また、文中では副詞用法、動詞用法、形容動詞用法、名詞用法、複合語と、様々な用法があることが指摘されている。

語末が漢語の場合、新聞記事の見出し語の例を見ると、

・藤井四段 28連勝（朝日新聞：2017年6月22日）

「28連勝した」の「した」が省略された形である。「漢語＋する・した・なる・なった・になってきた・ことになった…」の「する・した・なる・なった・になってきた・ことになった…」が省略されるのと同様に、オノマトペの場合も、「オノマトペ＋する・した・している・になる…」の「する・した・している・になる…」が省略した形で用いられる。次の見出しは、「ヒヤヒヤ＋した・させた・させられた」の「した・させた・させられた」が省略された例である。

・東北の雄 初戦ヒヤヒヤ（朝日新聞：2019年7月15日）

また、漢語の場合、

・ムンク「叫び」来秋日本へ（朝日新聞：2017年6月28日）

のように、助詞「へ」の後に「来ることになった」という言葉が容易に推測されるので、見出し語としては「～へ」の形で終わっているが、オノマトペの場合、

・石川高専 好機がちり（朝日新聞：2019年7月13日）

・高速道 3000人てくてく（朝日新聞：2018年3月19日）

「がっちり+つかんだ」、「てくてく+歩いた」のように、オノマトペと結びつきの強い動詞が省略されている。また、次のような例も見られる。

・ドキドキ通知表 ワクワク冬休み（朝日新聞：2017年12月23日）

・自然道てくてく 名所巡ろう（朝日新聞：2019年5月6日）

「ドキドキしながら通知表をもらった」、「ワクワクしながら冬休みを待っている／これから始まる冬休みにワクワクしている」、「自然道をてくてく歩きながら名所を巡ろう」等々考えられるが、オノマトペはこのように多様な用法をもっている。

日向茂男(1986f)は、新聞のスポーツ面の見出し語「バタ 若島津」「ヨロ 北天佑」「ズル 朝潮」の例を挙げ、「擬音語・擬態語は、ここでは述部の役目を果たしているといつてよいだろう。」と述べ、それを次のような文にし、

〔1〕若島津、柝司が引くと、バタ（ッ）。

〔2〕北天佑、玉竜が押し込むと、ヨロ（ッ）。

〔3〕朝潮、琴ヶ海が寄ると、ズル（ッ）。

「擬音語・擬態語は文表現上の重要な部分を占めていて、単に効果音と呼んですまされないかもしれないのである。このことをマンガを資料としてもっと深く考えてみるべきであろう。」と問題提起する。

新聞の見出し語の例を、漢語の例と比較して、「結びつきの強い動詞を省略する用法」と述べたが、果たして「省略」と言い切れるのであろうか。幼児が体操をする場面で、「跳んで。」という意味で、「ぴょんぴょんして。」のような表現をよくする。実際体を動かしている子供に声掛けをするなら、「跳んで。」という動詞を用いなくても、「ぴょん、ぴょん、ぴょん、ぴょん、ぴょ～ん。」というオノマトペだけで、「跳ぶ」という動きを十分引き出すことができるだろう。このような体操の場面では、「ぴょん」というオノマトペそのままの形で、「軽く跳ぶ」という動作を表現する。漫画の「歩く・走る」場面のオノマトペについても、「歩く・走る」という動詞は用いず、全てオノマトペのみの形で用いられているが、図8「ばたばた」なら「バタバタ走る・走り回る」、図19「たたたた」なら「タタタタと走る」のように、「走る」という「動き」まで表現するツールとして用いられているからではないかと考える。

オノマトペのもつ情報量の多さと、結びつきの強い動詞を省略してオノマトペ単独の形で用いることのできる文法的特質、更には、次章で述べる語形によって微妙なニュアンスを造り出すことができること等々、漫画においてオノマトペが活用される理由ではないかと思われるが、今後詳しく検討したい。

4 「歩く・走る」オノマトペの語形

金田一(1987)は、前掲の「擬音語・擬態語概説」(pp.3-25)の「七 擬音語・擬態

「動き」を表す漫画のオノマトペー「歩く・走る」を例として－（平 弥悠紀）

語の音と意味との関連」において、次のように述べ、オノマトペは語形によって、微妙なニュアンスの違いを表すことを指摘する。

……形の対立も、擬態語において微妙なちがいを表す。各々の形がよく揃っている、反転を表す「ころ」について言うならば、「ころっ」は転がりかけることを、「ころん」は弾んで転がることを、「ころり」は転がって止まることを表す。また、「ころころ」は連続して転がることを、「ころんころん」は弾みをもって勢いよく転がることを、「ころりころり」は転がっては止まり、転がっては止まることを表す。「ころりんこ」は、一度は転がりはしたが、最後に安定して止まって、二度と転がりそうもないことを表す。(p.20)

また、Waida (1984) は、Q (促音)・N (鼻音)・R (母音の長音化)・「り」・反復を「オノマトペ標識 (onomatopoeic marker)」と定義した。角岡 (2007) では、「第4章 オノマトペ標識」(pp.71-109)において、「オノマトペ語彙に規則的に見られる音声的／音韻的／形態素的特徴を示すもの」(p.73)を「オノマトペ標識」とし、「オノマトペ語彙と他の一般語彙との差異を際立たせる特徴」という表現が可能である。」(p91)と述べ、Waida (1984) の定義した五つに「有声化・硬口蓋化・摩擦音／破擦音交替」を加えた合計八つを「オノマトペ標識」として定義し直した。

しかしながら、角岡が同書で指摘するように、「Waida(1984) が提唱した五つのオノマトペ標識のうち、厳密にオノマトペ語彙に固有なものは「り／い」のみである。」(p.107)「Q (促音)・N (鼻音)・R (母音の長音化)・『り』」を構成成分として有していたり、あるいは「反復」という形態であるからとって、オノマトペとは限らないのである。

前掲の金田一 (1978) が「形の対立も、擬態語において微妙なちがいを表す。」(――は筆者による)と述べるように、擬音語・擬態語の特徴を考察する上で「語形」は重要である。玉村 (2000) が「音象徴語を語形 (能記) から捉えて音象徴語らしさを測る尺度として (有契度) という概念を提起」し、「形態的な見地による有契度も考える必要がある。われわれに音象徴語らしさを感じさせる語形というものがあり、それらはおおむね日本語の音象徴語の形態的分布と深く関わっていると考えられる。」と述べたことにも通じる。形態的な違いによって、どのようにニュアンスが異なるのかを見ていくことで、擬音語・擬態語の特徴がいつそう明確にされるのではないだろうか。そこで、いくつかの語形について、擬音語、擬態語それぞれの場合をまとめる。

〔表1：擬態語〕

タイプ	例	金田一(1987)	ニュアンス／視点
ABッ	おむすびがころっと転がった。	転がりかける	動きの始まりに視点
	マジシャンがバチンと指を鳴らすと、体がふわっと宙に浮かんだ。		
ABン	おむすびがころんと転がった。	弾んで転がった	動き + 弾み
ABンABン	おむすびがころんころんと転がっていった。	弾みをもって勢いよく転がる	「動き + 弾み」 + 連続性
ABリ	おむすびがころりと転がった。	転がって止まる	動きの完了／動きの終わった後の状態に視点
	天使が地上にふわりと舞い降りた。		
ABリアブリ	おむすびがころりころりと転がっていった。	転がっては止まり、転がっては止まる	「動き + 完了」 + 連続性
ABAB	おむすびがころころ転がっていった。	連続して転がる	動き + 連続性
ABー	大きな車輪が、ごろーんと回転した。		ある程度時間的に長い動き + 弾み

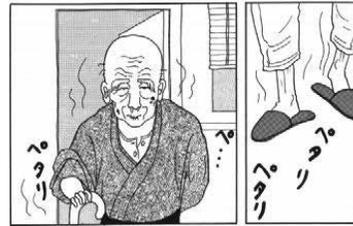
〔表2：擬音語〕

ABッ	ドアがバタッと閉まった。		音 + 瞬間性
ABン	ドアがバタンと閉まった。		音 + 響き
ABリ	ドアがバタリと閉まった。		音がした(後の静けさ)
ABリアブリ	図24「ベタリベタリ」		音 + 連続性
ABAB	ナッツをカリカリといい音をさせて食べる。		音 + 連続性
	図4「べたべた」		
AッAッ AッAッAッ	図10「たったった」		「音 + 瞬間性」 + 連続性
AAA AAAA AAAAA	図11「たたた」 図19「たたたた」 図27「タタタタ」		音 + 連続性
A-A-	カラスがカーカー鳴きながら飛んでいる。		声がある程度の時間続く + 連続性
ANAN	カンカンと踏切の音(警報音)が鳴っている。		「音 + 響き」 + 連続性
	図9「カンカン」		

本稿「3.1 擬音語の用いられた「歩く」の例」において、図4「べたべた」を挙げた。研修医なな子が疲れた状態で、夜中に病院の廊下を歩く場面で用いられた例である。図24「ベタリ ベタリ」はスリッパを履いた老人が歩く場面であるが、擬音語の語基を「AB」とすると、同一語基「ベタ」のヴァリエーションである「ABリ」のタイプにすることで、スリッパを履いた足音が「ベタリ」と終わって、また次に「ベタリ」と音がする様子をオノマトペが表す。「ABAB」と「ABリアブリ」という語形の違いによって、歩く様子の違いがそれぞれうまく表現されているのである。足音を表す擬音語によって、

老人が一步一步やっと歩いている「動き」をイメージさせる場面である。

図 24 「ペタリ ペタリ」



【研修医 なな子 2】 p.48

漫画のオノマトペで特に注目すべきは、促音の含まれる語形が多く見られることである。特に「歩く・走る」に関して言えば、「走る」場面で活用されている。促音はオノマトペに限らない。「とても」を強調して「とっても」、「すごく」を強調して「すっごく」のようにも促音を用いる。日本語学習者に発音指導を行う場合、「学校へ行った。」の「がっこう」であれば、促音の部分は「こ」の口構えをして（あるいは、次に「こ」を発音すると考えて）一拍待ち、「いった」であれば、「た」の口構えをして、一拍の時間を取るように教える。つまり、「音も動きもない時間を造る」のが促音だと考えることができる。

本稿「3.2 擬音語の用いられた「走る」の例」で、語基「タ」のオノマトペを挙げたが、例 3：図 10「たっ たっ たっ」、例 4「たー」、例 6：図 11「たたた」について、足が床や地面を蹴る時の音を「タ」で表すとすると、促音「ッ」は音のない時間、つまり、次に床や地面を蹴るまでの時間を表す。足運びの速さで言えば、「たー>タタタ>タッタッタ」となる。

次の図 25「チャッ チャッ チャッ チャッ」、図 26「タッタッタッタッタ」、図 27「タタタタタ」、「チャ チャ チャ」は、前川たけし著『A. S. ②』（2006 年、講談社）の犬が走る場面である。「タ」という地面を蹴る音で、走る様子を表しているのであるが、促音によって、地面を蹴って次に地面に足がつく間の時間を造り出している。促音のない「タタタタタ」の形は、音のない時間をカットし、地面を蹴る間隔を狭め、スピードが速い様子を表現しているのである。更に、図 25 のように、直接「走る」とは関係のない「チャッ チャッ チャッ チャッ」という「金属製の首輪であるチョークチェーンの音」によっても、「走る」動きをイメージさせる。図 27 のように、地面を蹴る音「タタタタタ」とともに、促音のない「チャ チャ チャ」というオノマトペによって、スピー

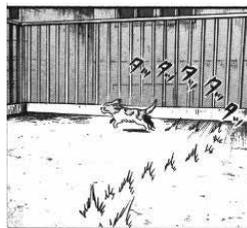
次の図 25「チャッ チャッ チャッ チャッ」、図 26「タッタッタッタッタ」、図 27「タタタタタ」、「チャ チャ チャ」は、前川たけし著『A. S. ②』（2006 年、講談社）の犬が走る場面である。「タ」という地面を蹴る音で、走る様子を表しているのであるが、促音によって、地面を蹴って次に地面に足がつく間の時間を造り出している。促音のない「タタタタタ」の形は、音のない時間をカットし、地面を蹴る間隔を狭め、スピードが速い様子を表現しているのである。更に、図 25 のように、直接「走る」とは関係のない「チャッ チャッ チャッ チャッ」という「金属製の首輪であるチョークチェーンの音」によっても、「走る」動きをイメージさせる。図 27 のように、地面を蹴る音「タタタタタ」とともに、促音のない「チャ チャ チャ」というオノマトペによって、スピー

図 25
「チャッ チャッ
チャッ チャッ」



【A.S. ②】
p.23

図 26 「タッタッタッタッタ」



【A.S. ②】 p.23

図 27 「タタタタタ」
「チャ チャ チャ」



【A.S. ②】 p.91

ドアップした走りであることが読者に伝わるのである。

図28「たたっ」は、指導医について歩く研修医なな子であるが、指導医が「くるっ」と急に方向を変えたため、足取りが乱れた様子を表現している。このように、促音によって、スピードやリズムを表現しているのである。例えば



【研修医 なな子 1】 p.7

「たたったたたったた…」のように、促音を活用すれば、自由にリズムを変えることも可能である。

漫画では、擬音語の「たたっ」のように、本来は「音」を表す擬音語であるにもかかわらず、「動き」を表現し、促音形を活用することで、「動き」にスピードやリズムや与えることができる重要なツールとして、擬音語が活用されていると言えるのではないだろうか。促音によって「音や動きのない時間を造り出す」ことができ、語末に用いられた場合は、音や動きの区切りを強調する。〔表1：擬態語〕に「ABッ」の例として、「マジシャンがパチンと指を鳴らすと、体がふわっと宙に浮かんだ。」の例を挙げたが、促音形の「ABッ」にすることで、浮かび上がる動きのほうに視点がいく。一方、「ABリ」の「天使が地上にふわりと舞い降りた。」のように、「語基+リ」の形は、動作が完了したり、動作が終わった後の状態に視点を置く表現である。程度のオノマトベについても促音形は同様の働きをする。「遅速」のカテゴリーの「さっ」は「Aッ」の形によって、瞬間性を強調し、「強弱」のカテゴリーの「ぐっ」も同様に「Aッ」の形によって、強さと瞬間性が強調されるのではないだろうか。

オノマトベは語形によって、微妙なニュアンスの違いを表すことができるが、漫画の「歩く・走る」という「動き」も、様々な語形によって動きの違いが表現されているのである。

5 結び

漫画の中で、「歩く・走る」動きについて、擬音語、擬態語がどのような役割を果たしているのか、森本梢子著『研修医 なな子』（全7巻、1995-2000年、集英社）を資料として考察した。「歩く」動作そのものを表現する場合、「歩く」カテゴリーのオノマトベではなく、擬音語が多く用いられている。特に「走る」に関しては、擬態語はほとんどなく、擬音語を活用して、「走る」動作を表現していると考えられる。絵にオノマトベを添えて、絵では表現しきれない内容を補うばかりでなく、絵はなくても、オノマトベだけで十分「動き」を読み取ることができる場合もある。このような「動き」を表現するオノマトベは、単に「動きの効果を高めるため」の「効果音」というよりも、「動き」そのものを表現するツールになっていると考えられる。そして、「音や動きのない時間を造り出す」促音によって、動きの遅速を表現したり、リズムに変化を与える。

「動き」を表す漫画のオノマトペー「歩く・走る」を例としてー（平 弥悠紀）

重複形によって、連続性を表現し、動作の完了や終わった後の状態を表す「語基+リ」、走る時に立てる音の響きを表す「語基+ン」も活用されている。オノマトペの様々な語形によって、動きの違いが表現し分けられていた。また、「歩く」カテゴリーのオノマトペは、歩く動作そのものよりも、身体機能に影響されたり、健康状態や心理状態を反映した歩き方を表現するために用いられていた。

参考文献

- 小野正弘編（2007）『擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』小学館
- 角岡賢一（2007）『日本語オノマトペ語彙における形態的・音韻的体系性について』くろしお出版
- 金田一春彦（1978）「擬音語・擬態語概説」（浅野鶴子編『擬音語・擬態語辞典 角川小辞典 12』所収）角川書店, pp.3-25.
- 鈴木雅子（2007）「解説一歴史の変遷とその広がり」（小野正弘編『擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』所収）小学館, pp.577-648.
- 日向茂男監修（1991）『擬音語・擬態語の読本』小学館
- 日向茂男（1986a）「マンガの擬音語・擬態語（1）」『日本語学』7月号, 明治書院, pp.57-67.
- （1986b）「マンガの擬音語・擬態語（2）」『日本語学』8月号, 明治書院, pp.98-108.
- （1986c）「マンガの擬音語・擬態語（3）」『日本語学』9月号, 明治書院, pp.56-66.
- （1986d）「マンガの擬音語・擬態語（4）」『日本語学』10月号, 明治書院, pp.86-96.
- （1986e）「マンガの擬音語・擬態語（5）」『日本語学』11月号, 明治書院, pp.81-87.
- （1986f）「マンガの擬音語・擬態語（6）」『日本語学』12月号, 明治書院, pp.109-119.
- 山口仲美（2005）「コミック世界の擬音語・擬態語」『築島裕博士傘寿記念 国語学論集』及古書院, pp.732-761.
- 玉村文郎（1979）「日本語と中国語における音象徴語」『大谷女子大國文』9号, pp.208-216. / 大河内康憲編集『日本語と中国語の対照研究論文集（下）』くろしお出版, 1992年, pp.145-157. に再録。
- （2000）「有契化と無契化—音象徴語の語形（その2）—」『日本と中国 ことばの梯』2000年, くろしお出版, pp.3-12.
- Waida, Toshiko. (1984) "English and Japanese Onomatopoeic Structures", in *Bulletin of Osaka Women's University, Studies in English*, Vol.36, pp.55-79.

